

## ～シリーズ～「JICA で働く人たちのヒューマンストーリー」

### ■第6回■ 岡本ルイス孝行さん（ブラジル事務所 現地職員）



“「今後の目標は」と聞くと「日々新たな挑戦の連続です。だから面白いのです。毎日忙しいですが、自分が納得する形で1日1日の仕事をこなしていければ、と思っています。」との答えが返ってきた。”

**JICA ブラジル事務所で一貫して日系社会支援事業に従事してきた岡本ルイス孝行さんに、その特異なキャリアと日系社会支援事業に対する意識と意気込みを語って頂いた**

サンパウロ市から東へ約 60Km に位置するモジ・ダス・クルーゼス市（以下、「モジ」）に生まれた。

父親は北海道出身の日系一世。生活環境が厳しく、15 歳から札幌にて修行し大工となったところへ、モジの同郷者から「モジの養鶏場で大工を探している。ブラジルに来ないか。」と誘いの手紙を受けたという。これを機に当時 24 歳の父親は意を決して単身でブラジルへ渡航。

母親は東京出身だが二歳で移住、ほぼ日系二世（いわゆる準二世）。（母親の）父親は北海道を出て東京でジャーナリストになったが生活が苦しく、妻と共にブラジルへの移住を決意。サンパウロ州ソコカバ市方面のコーヒー農園で生活、その後モジへ引っ越した。

異なる背景ながら、モジで出会った両親は自然と親しくなり、結婚。

当時のモジには 10 ぐらいの日系部落（コロニア）が存在していたが、ルイスさんが生まれたのは中で最も古いコクエラというコロニアだった。男ばかり 3 人兄弟の末っ子だった。

「田舎育ちの、大人しい子供でした。アメリカと日本のコミックスは大好きでした。当時マンガは高価でしたが、祖母が『お年玉』として『小学館』のマンガを買ってくれたのを覚えています。何度も繰り返し読みましたよ。」と当時を振り返る。

母親は教育熱心で、ルイスさんは幼少の頃から家庭で教育を受けた。そのお陰で幼稚園に入園する頃にはポルトガル語のアルファベット、ひらがな、カタカナ、簡単な計算までできるようになっていた。

その後ずっと現地の小中学校に通ったが、地域柄クラスの多くが日系人だった。「勉強はいつも日系人同士で競い合っていました。お互いライバル意識が強く、テスト

トは 80 点以上取らないといけないというプレッシャーが常にありました」と当時を振り返る。

中学を卒業が近づくとつれ、高校進学を意識するようになった。

「職業に繋がる高校がよいと思いました。父は養鶏場で働いていましたが、あくまでも雇われの身。『勉強だけはしっかりしてくれ』と常に言われていました。」

そこへ、モジから 65 キロ離れたサン・ジョゼ・ドス・カンポス市にある工業高校に通学していた兄を持つ同級生から声がかかった。結局、同郷の同級生（日系人）5 人が同じ高校を受け、全員合格。

当時、サン・ジョゼ・ドス・カンポス市にはブラジルの航空機メーカー Embraer 社の本拠があった。ブラジル最大の輸出企業、世界第 3 位の旅客機メーカーという超大企業。他には Philips 社や National 社（現 Panasonic）と言った電機業界、GM 社の工場があり、ブラジル有数の工業都市だった。モジと比べ都会だったので、田舎育ちのルイスさんには大きな刺激となった。

「下宿先は、5 人の家族総出で出かけて探しました。結局、同級生 5 人とも父親の知り合いの日系人宅でお世話になることになりました。」と言う。



こうしてルイスさんは工業高校の電子工学科で学ぶことになった。「早く仕事したい」、こうした思いもあり、実用性の高い分野を選んだのだ。

そして高校 4 年目、州都サンパウロ市にある IT 機器（プリンター）メーカーのアフタサービス部門にインターンとして派遣、卒業後そのまま就職することになった。

田舎育ちの青年が、南米最大の都市サンパウロで仕事をする。ルイスさんにとっては大きなステップアップだった。

入社後みるみる頭角を現し、その実力が認められて 1 年半ぐらいで技術サポート職につき、大手顧客とのやり取りも行うようになった。またその頃、夜間大学にも通うようになった。

しかし、この後人生の転機が訪れる。

「当時、ブラジル政府は IT システムの国産化を推進していました。しかし、コロール大統領政権（1990～1992 年）に貿易の大幅な規制緩和が実施され、IT 機器もその対象に含まれた。勤務先企業等国内勢は突然、技術や資金面などで圧倒的に優位な多国籍企業との競争を強いられ、シェアの差が開きました。勤務先は経営が厳しくなり、いよいよリストラの深刻な話が聞こえるようになりました。」

大学卒業が目前だったこともあり、ルイスさんは JICA 研修「移住者子弟上級技術研修」への応募を決意。そして遂に合格。

これが、JICA との縁の始まりとなった。「都会が見てみたい。」ずっと思いは変わらず、ついに先進国日本へ。1996 年 4 月。ルイスさん 25 歳の時だった。

それまでテレビ等で東京のことを知り「凄い」との印象をもっていたが、実際に街並みを目の当たりにし、先進国の大都会のインパクトはそのままだった。

日本では神戸大学経営ゼミでの研修に参加。アルゼンチンやメキシコ等、中南米各地から約 20 名の同期研修員が日本各地に散らばり、共に過ごした。

プログラムの後半、企業研修を希望した。学歴と職歴を活かされる電気関係企業を探したところ、担当教授の知り合いをつてに三洋電機貿易（当時）での研修に 1 年間参加した。そして日本での研修成果が認められ、1998 年 3 月のブラジル帰国後は

三洋電機(以下、SANYO)の現地法人にそのまま就職できた。

思い描いた通り、とんとん拍子に進んだキャリアアップかと思われた。

しかし、その後新たな転機が待っていた。

就職のタイミングで、ブラジル政府のレアルプランにより経済成長著しい時期を迎えることに。レアル・米ドルの固定相場(1対1)が導入され、韓国、中国含め複数の電気メーカーが進出してきた。一時期は20社以上の電気メーカーがブラジル市場を競い合っていた。

その後、SANYO 本社での後継者問題や経営不振が重なり、再編により SANYO はパナソニックに統合されることになり、その影響でルイスさんは退職することになった。2012年3月末のことであった。気づけば勤続14年を数えていた。

その後電気関係を中心に再就職を試みたがうまく行かなかった。

そうしたおり、JICA サンパウロ出張所(当時)の求人が目に留まった。「日本から派遣される職員をサポートする業務。日系社会支援に関わる業務。出張あり。」応募することにした。そして見事採用。2014年8月、ルイスさん43歳の時でした。

「それまで電機メーカーで勤務していた私が JICA での業務に挑戦することに対し、決して違和感はありませんでした」ときっぱり言う。「商品を理解し、相手に売り込むことに特化してきた私は、基本的には人間関係は好きでしたから。」

また、生まれ育った「典型的な日系コロニア」という環境のお陰で、ブラジルと日本の両方の文化や商習慣を知っていたため、JICA の日系社会支援業務を理解するのに役立ったという。「支援先である日系社会の各移住地を巡ると、それぞれの歴史、開拓者の人間模様、雰囲気と思い描く未来像等あらゆるものに触れたり、感じたりし、非常によかったですと思います。」と振り返る。

仕事が楽しいこともあり、日系社会と接する中で得られる情報や知見が蓄積され、それと共に自分の中で日系社会に対する関心が高まり、意識も変わっていった。

そしてある日、決して忘れることのない出来事が。

ある日、ボランティア派遣の要望調査のため、とある日系団体を訪れることに。なんと、地元モジのコクエラ部落の日本語学校だった。

こうして思わぬ出張から、22年ぶりの帰郷を果たすことになった。

かつて通った日本語学校の現状を目の当たりにし、愕然とした。当時午前の部、午後の部、夜間の部合わせて90~100名ほどいた生徒は、今では20名足らず。

案内した団体役員の中には少年時代にお世話になった日本語教師がいたが、先方は自分のことを覚えていなかった。しかし自己紹介すると相手は思い出し、途端に表情が和らいだことは今でも忘れられない。

サンパウロに戻ったルイスさんは故郷の日本語学校のためになんとかしたいと思った。

そして数か月後、努力の甲斐あって、日本語教師ボランティアの派遣が決まったのだ。



国連-リオデジャネイロ事務所(安全調査)

これまで、日系社会支援(ボランティア)以外に、庶務、安全管理、所内IT担

当、助成金事業等と幅広い分野で活躍してきた。

「JICA で仕事をしていて、支援先から感謝のことばが伝えられるときは、素直に嬉しいです。」と目を細める。

これまでで一番嬉しかった瞬間は「担当する『フジタ・ニノミヤチェア』<sup>1</sup>の一環で、2019年にサンパウロ大学法学部で開催された北岡 JICA 理事長（当時）の特別講義が滞りなく行われたことです。当時理事長はブラジルを訪れましたが、本特別講義は重要なイベントの一つでしたから。」

「今後の目標は」と聞くと「日々新たな挑戦の連続です。だから面白いのです。毎日忙しいですが、自分が納得する形で1日1日の仕事をこなしていければ、と思っています。」との答えが返ってきた。

モジの田舎から都会に出たいと切望した少年は、自分の手で目標を1つずつ実現させ、今では日系社会連携のプロとして充実した日々を過ごしている。+++

(了)



■岡本ルイス孝行（オカモト・ルイス・タカユキ）

サンパウロ州モジ・ダス・クルーゼス生まれ。おとめ座。

2014年8月 JICA ブラジル出張所（当時）日系社会支援（ボランティア）事業担当として採用。趣味はカラオケ。（高校時代からカラオケ同好会に所属）

人生のモットーは「Rir para não chorar」、直訳だと「泣かないために笑う」。

※～シリーズ～「JICA で働く人たちのヒューマンストーリー」では、ブラジルで国際協力に携わるJICA スタッフを紹介します。仕事面のみならず、これまでの人生や家族の様子、エピソード等も交えつつ、「人」としての姿にスポットライトを当てることで、ありのままの姿をお伝えします。

<sup>1</sup>詳細はこちらを参照下さい：[北岡理事長によるフジタ・ニノミヤチェア特別講義の実施 | ブラジル | 中南米 | 各国における取り組み - JICA](#)